

# 幕末・明治初年の庄内川北地域における医者 ある医者の軌跡から 岩淵令治

Physicians in the Shonai Kawakita Region in the Last Days of the Tokugawa Regime and in the Early Years of the Meiji Era

はじめに

- ① 医者の誕生
- ② 遊佐郷医者仲間
- ③ 医者の「西洋方」化と堀文庵  
おわりに

## [講文解説]

本稿では、庄内川北地域の村医師の「日記」から、医者になる過程、医者仲間の機能、医制発布前の医者の編成、の三点を検討した。百姓を嫌い、絵を好んだ文庵は、遊歴ののち、天保十四（一八四三）年四月より鶴岡の町医者の弟子となり、江戸での修行を経て故郷で開業した。彼の修行は同郷者のネットワーク、そして各地の文人や寺によって支えられていた。文庵は、近世後期の地域文化の高まりの中で医者となつたのである。彼の医療は漢方をベースとしながら、蘭薬も使用するというものであった。この文庵が活動した川北地域には、郷単位に組織され、相互の生業の維持（業代の定額化）や研究（医学書の学習）等を行う医者仲間が存在した。しかし、仲間は医業の独占化をめざすものの、村に対して優位には立てなかつた。当該地域においては、医者は仲間としての集団化を遂げていたが、仲間ではなく、地域社会が医者を認知するという状況だったのである。なお、医療を希求する百姓たちは、日常では

医者の言説を信用し、「御百姓」の一揆においては医者の参加を拒むなど、医者たちを異形の存在として認識していた。

さて、こうした医者たちは、明治初年に編成される。すでに町奉行所がおかれた鶴岡・酒田においては、藩の「御用」をつとめる「御町医」集団が存在した。この「御町医」たちは、天保四（一八三三）年に豪商とともに「医会所」を設立して医術を琢磨する。医会所は一時焼失するが、蘭学受容が進んでいた米沢より種痘の技術が伝わると、種痘の実施を目的に再建された。明治二年以降、酒田県・山形県は医会所を医療政策の基盤に据えた。御町医からの出願を契機として、県の出費で種痘や西洋医薬も用いた治療をすすめたのである。そして、医会所で医者の試験を実施し、在方も含め、医者を選抜していく。文庵はこうした動向を「西洋方」化と受けとめ、医業を継続するため、医会所の医者たちと親交を結んでいくのである。